
血朱眼

剣醒

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

血朱眼

【Nコード】

N1275D

【作者名】

剣醒

【あらすじ】

両親のいない二人暮らしの兄と妹。その兄妹に聞かされる話はある一族に関する話。その後の兄妹は今の生活を捨てることを決意する・・・

ブローグ0 兄妹（前書き）

自分が考えてた所々にコメディ（？）が入ったやつを書いてみました。つまらないですがみてくださいな

プロローグ 0 兄妹

暗い

寂しい

誰か

助けてくれ

「今日もいい日だな」

雲一つない空を見ながら俺は思った。最近学校がつまらなくなつてから俺はよく無断欠席や遅刻することが多くなつた。

おっと、自己紹介忘れてた。俺の名前は須藤 剛。すでつただけごく普通の高校2年生。17歳になつたばかりだ。

母親や父親や兄弟などがいて、日々話ができる家族がいるのが普通なら俺の家は少々変わっているだろう。なんせ、俺の家には俺以外に妹しかいない。両親は俺が物心つかないうちに俺と妹をおいて交通事故で死んでしまった。

「お兄ちゃん．．」

今日は水曜日。俺が唯一学校に行きたくなる日だ。

「お兄ちゃん！．．．」

理由は．．．．．

「ゴフッ！！」

.....

たく、何で朝からテニスのラケットで殴られなきゃいけないんだ。
飯をつくる妹がつくってる最中に殴ってくるなんて。滅多にあるこ
とじゃない。そうだ、俺の妹は須藤茜。すどうあかねテニス部に所属する中学
2年生。ちなみにキャプテンをやってるらしく、学校で一番強い
らしい.....

「お兄ちゃんが悪いんだからね！フライパンに持ってるから・・・」

ホワイ！？

何故料理が作れない＆作る気も起こさない俺がフライパンなど持つてないといけない？

朝食を食い終り片付けを終えた妹

「あつ、遅刻しちゃう。じゃあね。いってきまーす」妹はそういつて勢いよく扉をけとばす・・・が、

「忘れ物ー!!」

肝心なテニスラケットを忘れたらしい・・・

「お兄ちゃんも遅刻するよ!じゃあね。」

行ってきましたのチューの変わりですか!?俺のほっぺたにげんこつが……………

「じゃあそろそろいっかな」痛む頬をさすりながら俺は鞆を持って家を出る。

プロローグ1 忙しい日（前書き）

剛の通う学校についてです。

プロローグ1 忙しい日

ふっ、風が気持ちいいぜ。とか言いながら髪を直すやつがいるが、何故そうするかが俺には分からない。

しかも今時そんな奴はさすがにいないだろ。う。う。う。

「ふっ、この風超気持ちいい」俺の目の前にそいつって髪を直す奴が！！

俺は危険を察知して鞆で顔をかくす。

が。．．．．

「よお。須藤！何やってんの？」

しまったー顔を隠してたのにバレた！！しかも何やってんの！？は俺が言いたかった台詞なのに！！．

こいつは俺が苦手な五人の中に入るやつの人。河野 秀一だ。こいつのしょういち

「べ．．．別に何も．．．」

「お前、テンション低いなあ」

はつきりいうと君が俺の前になければテンション低い事はないんですけど。

俺は秀一の話シカトをしながら教室に入る。

「ッ!!」

おいおい。相変わらずの騒ぎ様だな。朝からチョークを飛ばし会うか!? まったく……しかも教室にチョークの粉が充満してやがる。

「おい、須藤が来たぞ!」その声と共にチョークを投げているやつらを睨む女子が俺の回りにあつまる。自分で言うのも何だが、俺は結構外見がよく、頭も良い。だから女子が集まるのも正直無理はない。

「須藤君おはよう。」こんな感じの聲が次々に俺に向かってくるなか、1つだけ

「私の物に近付かないで」という声が……

「おい、いつからお前のものになったあ!!?」

彼女は俺が苦手な五人の一人、雛^{ひな}困^い地^じ 雫^{しずく}。かなりの妄想家だ。

「だって、3歳の時に好きだって言っただじゃない。」ホワット? 勝手なこと言わないでーくれないー?

「俺がお前を好きになると思っか!? しかも3歳の時とか普通におぼえてないし」

「だって、……」

こんな感じで授業中も続くわけ。超悲しいよ。俺

放課後には俺はもうくたくただった。理由は雫にあったのだ。

俺の回りにいる女子達に向かって

「そんなに私のに近付きたいなら、私を倒してみなさいよ。」

何ー！？しかも何かゲーム見たいな展開・・・・・・・・次の瞬間俺は女は怖いと改めて思った。

「あらあ、雫ちゃんいいの？倒しちゃってえ」すっごい形相で雫を睨む。妹以外だよ。女が怖いと思ったのは・・・・・・・・これには雫も驚いた様子。だが、もう後には戻れないらしい。

「来なさいよ。すっごい力持つてる私に勝てるわけがないでしょー！？」いやー、ここで妄想使うか？まあ仕方ないな。あいつの場合は。

結局負けたのは雫。リンチを食らって泣いてしまったのだ。しかも「何で？何で爆発が起きないのよー」と言いながら・・・・・・・・完璧に危ない・・・・・・・・それで勝った女子達が俺に集まり、今まで以上にきを使わなきゃいけなくなったのだ。

「はあ、疲れたー」そう言いながら教室を出た。

「ふふふっ、見ーっけ」双眼鏡を覗きながら女が呟く。彼女がいるところは4階立てのマンションの屋上。そしてまた呟く。
「楽しみー」

ブローグ2 中学（前書き）

今回は茜について書きます。兄妹共に大変です。

プロローグ2 中学

「ハア．．ハア．．．」

私は急いで朝練に間に合うように走って登校する。一応私はキャプテンだからサボることは許されない。

「ッ！？」

目の前の人を見て少々立ち止まる私。「おっはよー。あっちゃん」
声の主は如月 葵。^{きんづき むぎ}クラスはちがうけど同じテニス部にいる。葵ちゃんは副キャプテンをやっていて腕もほとんど私と変わらない。

「．．．．．」

私は黙々と走り続ける。途中で無視するのも可愛そうかなと思ったけど．．．後ろを振り向いたら、

「いつものことだし」と言いながらう　こを木の棒でつついていた。可愛そうから一気に危ないと思った私は加速して関わらないようにした。

朝練を終えて教室に入るといつも通り

「おは。チュー」と言う人がいる。その人の名前は網代 暉。^{あじろ ひかる}私は無視をして向こうにいる友達に向かっていった。

「ええ．．挨拶もおはようのチューもなし！？」彼は悲しそうに今

いる教室から出ようとする。

「あのねえ、網代君。私は貴方にチューとかすると思う!？」

「だってさあ、スキンシップとらないと須藤は俺のこと好きになつてくれないから。」葵ちゃん以上に危ないと思った私はキツメに「私お兄ちゃんにはパンチしてるけどお兄ちゃん以下の貴方にキスするとか考えられない」と言う。

さすがの網代君でもこれにはノックアウトだろう。

ところが・・・

「そういうところがまた良いんじゃない。俺を突き飛ばす感じ」

いけない。彼の言葉は吹雪なみに背筋に寒気を走らせた。もう駄目だと思った私は無視をして友達と話をしだす。

「ターゲットを見付けました。どうします?」

「放課後を待て。私ももう一人を見付けた。」

青みがかかった灰色のコートをばおった男と同じ格好の女が携帯で話をする。

「分かりました」そういつて電話を切った男は再びターゲットを監視した。

プロローグ3 合流（前書き）

えっと、とうとう謎の二人が話します。（少しはなしたところで終わりますが）

プロローグ3 合流

放課後

俺はいつものように連れと帰る。あつ、そうだ。俺が水曜にのみ学校に行く理由を言うのを忘れてた。実は俺は年上が好みで、3年の葉月 里美先輩はづきりみに恋をしてしまった。

なんでそれが水曜と関係あるかって？それは……

「須藤！。時間割り変わったぜ！。」

「おう。すまん」俺に時間割りを届けてくれた奴は俺が付き合いやすい五人の中の一人、斉藤 剛さいとうたけし。ただ名前が似てるのが難点だ。

「そおいやあ、朝にお前の妹がう こを連れてたぞ。」

ハッ！？何をわけの分からないことを？こいつ、エロ本読みすぎて頭がいつてしまったか！？

「お前、エロ本見すぎただろ。冗談やめとけって」

「いや、ホントに見たんだって」とうとう頭が壊れたらしい軽く脳震盪起こした方がなあるかなあ？

今日はたまたま部活がなくなったので、私は早く家に帰ってテレビを見ようと思って走って帰っていた。

途中

「よお、茜ー」という声がしなかったでもなかったような気がするけど……」

「おい！実の兄貴をシカトですか！？俺ショック……」
ちっ、邪魔ものが。と思ったが仕方がなかったので

「お兄ちゃん、ただいまの……」と言って両腕を広げ、お兄ちゃんの方へ走っていった。

「おお！ハグしてくれるのかぁ」とわけの分からない発言をするお兄ちゃん。可愛そう……私の広げた腕はお兄ちゃんの首にラリアットを決めた。

「ゴフツ？」そのまま逝っちゃっても良かったのにな。ほしい。

「あなた達が須藤剛に須藤茜ですか？」

私達に向かって声がした。

「そうですけど、貴方達は？」見るからに怪しげな二人。さっき話しかけたのは女の方だろう。男が太く座った声でいった

「俺らはお前らの過去を教えてやろうと思って来たただけだ。」

プロローグ 4 前世（前書き）

茜と剛の過去（ちょっと違うけど）がいよいよ！楽しみにしないでください。

プロローグ4 前世

「私たちの過去って!？」

俺の妹がわけがない様な顔をして言った。分からないのも無理は無いだろ、俺だって知らない。ただ、今までの記憶で不明なところはないから、生まれてからの話ではなさそうだ。

「で、教えるよ」俺の発言が意外だったようで、男は少したじろいた。

「まあ、教えてやるよ。」女が話出す

「私達はある一家を探していた。手掛りは四人家族。でもそのうち二人はしんでしまった。交通事故で」は？俺の家とおんなじじゃないか。俺が喋ろうとしたが、女は構わず話す。

「そのことが分からなかった私達はその一家を探すのが困難になった。しかし、偶然写真があり、その二人を見付けることが出来た。あなたはうすうす気付いてたようね。剛君。」何ですと!?!俺が気付いてた?あいつらが来るのが?冗談じゃない。夢だ。これは妹は硬直状態。ヤバイ。

「だからこうして話せることが私にとってかなり嬉しい。ちよつと脇道にそれちゃったから本題へ行きましょう。茜ちゃん、大丈夫?」
「う．．．うん．．．」大丈夫なわけじゃないか。あんな震えて．．．

「貴方たちの先祖は代々旅に出ている。しかも貴方たちの前世も須藤家に生まれている。貴方たちもそろそろ旅に出る時期なの。その旅ではあるものを探すの。それは光、闇、炎、水それぞれの球なんだけど、それぞれには特殊な力が備わっている。それを使って須藤家を大きくしていく必要がある．．．」

「ちょっと待って．．．」突然茜が口を開いた。

「その間みんなとあえないんでしょ？」確に、旅に出るという事はみんなとわかれなければいけない。だがまた会える．．．

「確にそうね。貴方たちはまた会えると思ってるけど、今言った特殊な力の1つに今までのみんなの記憶から貴方たちの存在が消えてしまう。それでも私は行って欲しいんだけど、ちなみに私達は忘れないけどね。」う．．．みんなの記憶から消えちゃう、かあ。嫌だな。そりゃあ。

「断る。みんなと会えないのは御免だ。」

「私も．．せつかく仲良くなったのに、嫌だよ。」

「でもら、そうしなかったら世界はバランスを失ってしまうの。」

女その言葉を聞いて俺たちは思わず

「「なんだって!？」」と叫んでしまう。妹はハモったことに不快を感じたらしく、俺を思いきり蹴った。俺はMじゃないのに．．．マジヘこむ。

「特殊な力の二つ目にはバランスの管理みたいな感じの力なの。」

．．．．．行くしか無いのか？でも先輩とかと離れたくない。

そして．．．

「わかった。俺はいくよ．．．」妹が驚く。しかし女達はそういう事になることが分かってるらしく、頷く。

「茜。お前はとうするんだ？」男が聞く。

「私は．．．．」まだ決心がついていないようだ。

「明日またきにくる。その時までには決めておけ。」そうって二人は去っていった。

ブログ5 眼（前書き）

高校がちょっと忙しいので更新遅れます。すみません

プロローグ 5 眼

「どうして彼等に眼の事を言わなかったんです？」男の方が暗い空気を割って話始める。

「理由は特にないわ。ただ．．．．．」女はそこまで言っていると喋るのをやめた。また沈黙．．．．．

「お兄ちゃん、私はどうすればいい？」自分の部屋にいた茜はペンギンの縫いぐるみに向かって話しかけていた。このペンギンの縫いぐるみは剛が茜の誕生日に買ってやった物だ。

私はみんなと離れたくない！でもお兄ちゃんはその思いのなか、行くことを決めた。どうやったらその決意が．．．．．

「わッ！！」

「キヤー！」

「ちよつと、お兄ちゃん。部屋に入るときはノックしてって言ってるでしょ？」

「したさ、ノック。だけど反応無かったから死んでると思って入った。」

そう、剛はノックを10回も繰り返したが反応が無かったので心配したのだった。

「で、決めたか？」剛が重い口調で言った。

「．．．．」黙る茜に剛は

「お兄ちゃんの言うことは聞けつて！！」

バツシーン！！

剛のビンタが茜に当たる前に茜がビンタを剛にしたのだ。

「俺はシヨック．．．せつかく心配してやってたのに．．．」今にも泣きそうな剛に茜は言った。

「そんな頼りないお兄ちゃんだったら、私が行かなきゃ心配でしょ？」

俺はそんなに頼りないですか．．．そんなこと言わなくても．．．

．まあ結果オーライかなあ？シクシク．．．そんなことを剛は思いながら

「分かった．．．．」それだけ言って部屋から出ていった。

「お待ちしていましたよ。」男と女の眼の前を剛と茜がいた。

「で、どうするんです？」女が心配そうに茜に話しかける。

「行くしかないでしょ。」

「まあ貴方が行かないと言っても行かせるつもりでしたがね。」男がそう言ったのを聞いて茜は自分で決意したことに安心した。

「昨日話忘れたことを言います。と言ってもわざとはなさなかった

のですが．．」

「何だ？」

「貴方たち兄妹はある特殊な眼を持っています。それは貴方たちしか開眼の方法を知らないのですが．．．その眼は血朱眼と言います。それは詳しいことは分からないので貴方方で調べてください。

それから．．．」

「それから？」

「私達は貴方方を忘れません。」

「「は？」」「意味のわからない発言に剛と茜は思わずいつてしまった。

「私達は．．．」そういつて女たちはフードをはずす。

第1話 旅立ち（前書き）

更新がかなり遅れました。ホントにすみません。これからもうこういうことが続きますがよろしくお願いします。

第1話 旅立ち

女はフードを外した。

なんと、俺が好きだった里美先輩だった。

「先．．．輩？」

「ゴメンね、剛君。私だって言わなくて．．．」何で．．何で俺は先輩だって気付かなかったんだよ．．．．．

「そんなに気にしないで、」

「．．．でも、俺は．．．」

正直、どうしていいのかわからない．．．．．でも．．

「じゃあ、行くわ」笑顔でこう言うしか、俺には出来ない．．．すごく悔しい．．．

「いつてらっしゃい」笑顔で返すその言葉に涙が出そうになる．．．
．．．行きたくなる．．．．．でも行かなきゃ！

「よっ！」私より少し高めの男がフードをとって言った．．．誰
??知らないかおに私は戸惑ってしまう．．．．．

「まあ、分かんなくても無理はねえだろ」ニカツと笑う

「男の子」に私は申し訳なかった。実際、彼は私と同じ年なのだ。
「誰？」

「うーん。誰だろう？」適当な返事に私はいつもお兄ちゃんにするように自然とテニスラケットで殴ろうとした。が、彼の言葉に手が止まった。

「早乙女 陽おとめあきひで分からねえか？」覚えている。幼稚園で初めて私が恋をした相手だった。彼は純粹でかつ活発な男の子だった。今もその面影を残して……

「いろいろ話したいけど、もう行かなきゃ」私は自分にいい聞かせながらそうつぶやいた。

「おう。頑張れよ」彼のあまりにも優しい言葉に私は涙をこぼす。

「準備ができたみたいだからせめてもの私たちの気持だと思って受け取って？」剛の学校にいる里美が綺麗な石を渡しながら言った。

「これは？」

「お・ま・も・り」にこにことしたかおがまた可愛らしい。

「じゃあ行ってくる。俺たちがいない間よろしくな」

「うん。気を付けてね」

「帰ったらいろんな話をしようね」

「ああ、楽しみに待ってるから．．」

こうして剛と茜が旅立った．．．

空には星が夕焼けの空にちらつきながら．．．

第2話 石

「結局きちまったな．．」お兄ちゃんの少し静かな声を聞くとまた涙を溢しそうになる。

「お前は帰っていいぞ」お兄ちゃん！？いつものお兄ちゃんならそんなことを言わないのに．．

「何で？」しばらくうつ向いていたお兄ちゃんが重い口を開いた

「お前に辛い思いさせたくないただそれだけだよ」

心配してくれるのはありがたいけど、私はもう決めたから．．

「まあ深くは言わないよ」

バシッ！！

気付いたら私はお兄ちゃんの頬を叩いていた。

「そんなこと言っただって似合わないんだから」そうって私は彼の懷で泣いていた。

ところでこの石は何だろう？私のとお兄ちゃんの色が違う．．も
しかしたら．．

「な!？」

お兄ちゃんの声で私は我を取り戻した。エッ？

例えばようない生き物が荒い息をたててこちらをにらみつけていた。

「もうかよ．．」

「何？」

「話はあとだ」

そういつてお兄ちゃんは生き物に向かって走り出す。そして拳をつき出すと雷が手を覆っていた。

バリバリバリ．．．

そういいながら生き物に当たるとその生き物は焦げて灰になっていた。

「あれが俺らの旅を邪魔するやつらだよ」そう言うお兄ちゃんは笑っていた。

「俺のは黄色。お前のは？」

「．．．．」

私のは白だった。何だろう？

「分かんねえな何だろう？」

「止まらないで歩こっ。」

また歩く私たちはこれからどうなるんだろっ？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1275d/>

血朱眼

2010年11月2日21時41分発行